

## 中国雲南の観光開発をめぐる研究動向

橋 谷 弘

### 1. はじめに

東京経済大学雲南研究会・雲南研究所では、2013年に『中国雲南の開発と環境』を上梓し、その中で筆者は、第4章「雲南省の観光開発と少数民族文化」を分担執筆した<sup>1)</sup>。その論文は、2005年から同研究会・研究所が行った調査を記録することに主眼を置いたため、雲南省で本格的な観光開発が始まる以前の歴史的過程における事例の紹介を中心としていた。また、先行する観光研究の中で蓄積されてきた様々な概念や議論を取り入れた考察も、十分に行うことはできなかった。しかし、その後の経済開発や観光開発による雲南省の変化は著しいものがあり、同時に2000年代に入ってから雲南省における観光研究でも多くの成果がみられるようになった。とくに、2005年11月に開かれた昆明旅游産業発展大会では、雲南省政府が「昆明旅游二次創業（雲南観光の2回目の創業）」を提唱し、雲南省の観光開発は新たなステージに入っている。このため、さらに調査を重ねて観光開発の現状と問題点を分析する必要があるが、本稿はその準備作業として、雲南省の観光開発をめぐる中国の研究動向をまとめたものである。

前回の論文でも、単行本を中心に簡単に先行研究を紹介したが（杨福泉 [2005]・杨寿川 [2003]・张曉萍 [2005]・尹绍亭 [2002]）、その際に紹介できなかったものもある（Mitchell, S., [2003] など）。本稿では、その時に全く触れることのできなかった雑誌論文を中心に、主として2000年代以降の研究動向をまとめてみた。すべての論文をとりあげることが不可能だが、いくつかの注目すべき論点、あるいは関心を集めている論点に絞って、主要な研究を整理・紹介している。最近の中国における学術論文は、わずか数ページのものも多く、通常の論文の序論と結論、あるいはインプリケーションだけを述べたような内容が一般的である。したがって、本稿では具体的な事例紹介や調査データの記述のある論文に限ってとりあげた。これらの論文における個々の論点の掘り下げは必ずしも十分とはいえないが、できるだけ多くの論文を紹介することによって、全体として現在の中国学界における関心のあり方や、雲南省の観光開発の現状が浮かび上がってくるのではないかと考えている。

## 2. オーセンティシティ

有形・無形の文化財の保存にあたって、オーセンティシティ（Authenticity：真正性・真実性）に留意することは、世界的な潮流になっている。その淵源は1964年にユネスコの会議で採択されたベネチア憲章<sup>2)</sup>にさかのぼるが、1994年にユネスコの後援によって開かれた「オーセンティシティに関する奈良会議」では、「文化遺産をそのすべての形態や時代区分に応じて保存することは、遺産がもつ価値に根ざしている。我々がこれらの価値を理解する能力は、部分的には、それらの価値に関する情報源が、信頼できる、または真実であるとして理解できる度合いにかかっている。文化遺産の原型とその後の変遷の特徴およびその意味に関連するこれら情報源の知識と理解は、オーセンティシティのあらゆる側面を評価するために必須の基盤である」と宣言されている<sup>3)</sup>。

一方、観光社会学や観光人類学などの分野でも、今や古典となったマキャネルの問題提起<sup>4)</sup>をはじめ、しばしばオーセンティシティがテーマにとりあげられてきた。マキャネルによれば、近代人は、近代化によって失われた過去の文化を他者の実生活の中に求めるようになり、観光化され「舞台化されたオーセンティシティ」が生み出されたといわれる。その後の研究では、問題の多面性をめぐってさまざまな議論も生まれている。雲南省をはじめ、中国の研究でもこのような問題意識に立つ成果が目立つようになってきた。

たとえば、楚雄彝族自治州の彝人古鎮をめぐる議論がある。彝人古鎮は楚雄市経済開発区にあるテーマパークで、100ha以上の敷地に25億元を投資して、2005年から建設が進められてきた。彝族の伝統住居に似せた建築や彝族文化を紹介する展示もあるが、基本的にはホテル・飲食店・観光商店などを備えた娯楽施設である。2009年には、国家旅游局が指定した全国147か所の国家4A級旅游景区の一つとなった。

劉徳鵬・張曉萍 [2009] は、この彝人古鎮が伝統とは無関係な模倣式古鎮（imitative ancient town）であることを認めながら、舞台化された展示区（「表舞台」）と彝族の現実生活（「舞台裏」）を完全に切り離すことによって、むしろ観光客に受け入れられる「真実性」を創り出していると論じている。張文芬 [2012] と張文芬・李天順 [2012] も、基本的にこれを受け継ぎながら、さらにその論旨を強調している。しかし、同時に筆者たちが指摘するように、この模倣式古鎮が観光客に誤った彝族文化を植え付けることにならないのか、あるいは「模倣」によって生まれるオーセンティシティに対する観光客の不満を無視できるのか、そしてこのテーマパークの成功はオーセンティシティよりも立地条件やマーケティングの効果にすぎないのではないかなど、今後の研究の課題は残るだろう。

また、昆明市の雲南芸術劇院で毎日上演されている、有名な歌舞ショー『雲南映象』のオーセンティシティを論じた研究もある。『雲南映象』は、雲南省大理出身の白族の舞踏家・

楊麗萍が芸術総監督を務め、2003年8月の初演以来、昆明だけでなく中国内外で広く上演されてきた。出演者の7割以上が雲南省各地の少数民族で、民族衣装や民族歌舞を取り入れた歌や踊りが披露される。このほか、類似の歌舞は全国で流行しているが、著名な映画監督・張芸謀が全国で展開しているビジネス＝『印象』シリーズの一つである『印象・麗江』について、上演企業の総経理へのインタビューとコメントを記録したものに、羅洁璐 [2012] がある。

『雲南映象』に関しては、高芳・欧阳佳佳 [2007]、高芳 [2008] a、高芳 [2008] bが、これをさまざまな要素に分解して「真実性の内包」について検証し、観客の反応についても実証的に調査しながら、このパフォーマンスが観光客の要求とオーセンティシティの保持の両立に成功したと評価している。さらに、杨丽琼・吴丽娟 [2008] は、雲南省全域の様々な民族文化のパフォーマンスを紹介し、観光パフォーマンス市場の創出という観点から、雲南映象モデルが他の歌舞劇などにも波及して、観光客の求める「真実性」を提供しながら商業的に成功したと評価している。これらの研究は、マキャネルを援用しているものの、オーセンティシティを提示したとされるのは、もはや少数民族の「舞台化された実生活」ですらなく、創作された文字通りの「舞台」である。それにもかかわらず、上演する側にも、研究する側にも、民族文化のオーセンティシティを求める意識がみられる点に、観光や少数民族文化をめぐる中国の現状が象徴されているように感じられる。彝人古鎮も『雲南映象』も、経済開発を支えるための観光産業の発展という問題意識を持ち、それを正当化する論理として民族文化のオーセンティシティが強調されているのではないだろうか。

しかし、現地調査に基づく研究では、その両者の調和は単純にはみられない。たとえば、文化遺産の保存という観点からチベット建築を調査した研究として、Mieggeほか [2008] がある。執筆者は外国人だが、中国人と連名で中国の雑誌に発表されたものなので、これもとりあげることにしよう。この研究は、ヨーロッパの建築家が雲南省北西部を踏査してチベット族の伝統建築と村落を調査し、保存の前提となる知見を整理したものである。観光に対する彼らの主張は、雲南省を訪れるヨーロッパの観光客が、ヨーロッパの村落を訪れる観光客と同様に、リアルでオリジナルな雲南農村の姿を求めているという前提に立つ。そして雲南の人々はこれを自覚せず、伝統が破壊されつつあるという危機感が表明されている。とくに、最近増加している「チベット様式」の近代建築がいかにオーセンティックでないかということ、具体的な事例をあげながら批判する。その論理は明快だが、伝統的な建築様式の保存や継承と、チベット観光の「舞台裏」である近代的な実生活との葛藤については、はじめから視野に入れられていない。

そのあたりの複雑な様相を論じたのが、ルーゲー（瀘沽）湖のモソ（摩梭）人村落の観光開発の影響を調査した、彭莹・齐欣・王昕 [2013] である。この研究では、観光開発をめぐるステークホルダーを分析し、観光開発者は舞台化されたオーセンティシティの商品化でモ

ソ人の文化を歪めて伝え、モソ人コミュニティは収益の増加とともに観光開発への懸念を捨てて「表舞台」と「舞台裏」の違いがあいまいになり、観光客は各自の背景によってオーセンティシティの受け取り方が異なるという問題点を具体的に指摘し、三者のバランスの重要性を説くとともに、「真実性」と「原真性」の調和の問題を模索している。同じようなステークホルダーの分析は、シャングリラに関して後述の楊桂華 [2003] にもみられる。

また、民族文化の商品化に関わる問題点について、民族工芸品を通じて指摘しているのは、張曉萍 [2001] である。雲南省の観光工芸品について論じたこの論文は、具体的な調査に基づくものではないが、カナダのイヌイト工芸の観光商品化による問題点を指摘した Graburn の論考など欧米の観光人類学の議論を紹介したうえで、雲南省でも観光業の発展とともに工芸品の中に外部からもたらされた産品や大量生産品があらわれ、一般の観光客もオーセンティシティよりも美しさや持ち運びやすさを選ぶと指摘して、伝統文化の変容への懸念を示している。

### 3. 昆明の都市観光

近年、世界各国で都市観光が盛んになり、これに関する研究も多いが、中国でもこの分野への関心が高まっている<sup>5)</sup>。同時に、急速に進む住宅建設などの都市再開発が社会問題となっており、都市の観光資源にも影響を及ぼしている。たとえば、中国全土で進む都市再開発と歴史的景観の破壊に関して、研究書ではないが、ルポルタージュのエッセイ集である祝勇 [2013] がその雰囲気をよく伝えている。同書では、「十城 (10 都市)」のうち中国における 8 都市の一つとして雲南省の省都・昆明がとりあげられ、茶馬古道の要地である昆明城外にあった順成街の客棧 (旅館) の、美しい建物が撤去される様子が描かれている。

しかし昆明の対外的イメージは、都市固有の観光資源とは、やや異なるようである。街頭アンケートを分析した徐尤龍・楊懿・康嫻潔 [2012] は、最も強いイメージが「気候」であることを紹介している。また、寧德煌、・王曉東 [2010] は、外国人による英語のブログにあらわれた昆明のイメージとして、第一に「気候」、第二に「石林」が目立つと分析したうえで、昆明のブランドとして「春城」を打ち出すことを提唱している。中国国内のネット上の評価を分析した賈磊 [2013] でも、昆明のイメージは圧倒的に「気候」である。予想される通りの結論ではあるが、昆明のイメージが都市固有のものよりも、自然環境や自然景観に偏っていることが確認できる。したがって、自然景観を主たる資源とする昆明と、人文景観を主とする西安、両者を兼ね備えた成都を比較しながら、海外から訪れる観光客の国籍に違いがみられることが、張娟娟・馬耀峰 [2011] で指摘されている。

また、観光都市として昆明の国際競争力は強くないようである。北京・上海をはじめ全国の観光都市の国際競争力について、10 都市を 24 の指標によって比較した姚宏・孫根年・賈

英[2007]をみると昆明は総合評価で最下位, 27 都市を 39 の指標で分析した闻飞・王娟[2012]でも 20 位にとどまっている。ただし, 珠江デルタを取巻く 14 都市を, 19 の指標で分析した罗志辉・甘巧林 [2014] では, 昆明の順位は低くない。さらに観光ハブとしての昆明の機能に限って, 階層化ファジィ評価によって他都市と比較した马继刚・宋金平・朱桃杏 [2012]によれば, 近年の交通インフラ整備を反映しているのか, 昆明は上位である。马继刚・李飞・周彬学・唐忠明 [2014] も, 観光ハブ機能を高く評価している。また, 张瑜・马耀峰 [2008]によれば, アメリカ人の昆明に対する印象は, 必ずしも低くないとされる。马耀峰・张佑印 [2007] では, イギリス人にとって自然に恵まれた昆明は魅力的であり, サービス価格とサービスの質との整合性もみられると指摘している。さらに, 谢雪梅・马耀峰・白凯 [2011]によれば, 昆明を訪問する前の認知度は高くないが, いったん訪問した後には認知度が高まるといわれる。

こうした中で, 都市観光固有の目標を「文化街区 (Cultural Blocks)」の建設に定めて論じたのが, 徐秀美 [2011] である。近年, 昆明市中心部で進められている正義坊天街和昆都时尚文化娱乐区, 春城百年铁路风情街区, 昆明官渡古镇などのテーマ文化街区が簡単に紹介され, これらの再開発による Recreational Business District (RBD) の形成が論じられている。この RBD という構想による中心市街地の観光開発は, 中国の他の都市でも一斉に進められており, 注目すべき動きだろう。これに関連して, 陈茜茜・罗明义 [2012] では, 昆明を都市中心・環都市・都市周辺の 3 地区に区分して, それぞれの観光資源の集中度を計量的に分析し, その特色を生かすことを提唱している。ただし, BRD の無秩序な開発については, 伝統ある建築などの景観が破壊されるという懸念が, 経済開発を進めてきたはずの共产党雲南省委書記から出されるほどの状況であり (江枫 [2013]), 今後の展開が注目される。これに関して, 袁国友 [2001] は, 他省のさまざまな都市文化遺産の状況にも触れながら, 昆明の「歴史文化名城」(1982 年公布) 構想下における文化遺産保護に対する留意点を指摘している。

また, 昆明の観光開発の契機となった 1999 年の昆明世界園芸博覧会 (世博会) と, その跡地を利用したテーマパーク昆明世界園芸博覧園 (世博園) について, メガイベントと都市観光という観点から, いくつかの興味深い論考が出されている。戴光全・保刚 [2006] は, アンケート調査の結果から, 世博会と世博園の印象は次第に分離し, その原因は観光ポイントとしての世博園のイメージと, 世博会の会場だった世博園のイメージの分離にあることなどを明らかにして, 都市観光の対象としての世博園の将来像を考察している。李小波・于希贤 [2001] では, 99 年の世博会のテーマが分散していたことを批判し, 「人と自然」を掲げるなら人工的な築山を築いたイベント会場だけでなく, 周辺の鳴鳳山地区を含めた総合計画が必要だったと指摘している。陈浩ほか [2010] は, メガイベントである世博会の移植 (Implantation) が都市の物的構造を大規模に変化させ, 昆明の社会空間的進化 (evolution)

をもたらしたことを、具体例をあげながら実証している。世博会開催後、世博園周辺は雲南野生動物園など観光施設が広がると同時に、住宅団地も増加し、変貌を続けている。また、以前は昆明中心地からみると郊外だったこの地区も、北市区の大規模住宅団地開発など昆明市街地が膨張する中で、都市空間における位置づけが変化している。他の観光拠点とともに、今後も注目すべき対象だろう。

#### 4. 創られたシャングリラのその後

かつて中甸と呼ばれていた雲南省西北部のチベット族地区が、観光開発のためにシャングリラ（香格里拉）と改名された経緯は、筆者の以前の論文でも紹介した。その後、この地区は2002年から四川省やチベット自治区も含めた9市州で構成する中国香格里拉生態旅游区に拡張され、2007年には中央政府が「香格里拉生態旅游区総体規画（2007 - 2020）」を策定して観光開発が続いている。

このうち雲南省地区の観光業の基本的な数値は龍彦青 [2008]、開発を推進する立場からの概観は金蓮芳 [2014]、国内旅行者の動向は黄静波 [2006] にみられる。また、雲南・四川・チベット3地区の競合の実態については、楊小明 [2013] にまとめられている。

一方、シャングリラの観光開発で生じた問題点も、さまざまな角度から指摘されている。熊燕・楊筑慧 [2007] はシャングリラへの改名の経緯を詳細に跡付け、今でも住民の間では官製のシャングリラではなく中甸と呼ばれていることや、観光開発が必ずしもチベットの伝統継承や理解につながっていないことを紹介している。陳飆ほか [2007] は、シャングリラの観光市場が急速に発展したにもかかわらず、周辺のコミュニティは必要な財・サービスを供給することができず、その利益が享受できないと指摘している。また、徐新建 [2012] は、シャングリラとイ族の祭典「火把節」を題材に、観光開発が民族伝統に与える正負両面の影響について論評している。庄志民 [2006] は、雑誌『中国国家地理』の大シャングリラ特集号に掲載された言説を読み解き、そこにあらわれた美辞麗句と現実との矛盾をついている。

村落レベルの観光（郷村観光）の個別研究も数多くみられる。シャングリラの民族生態観光接待モデル村である霞給村については、鄧永進・郭山 [2001] で構想の概略が紹介されているが、楊桂華 [2003] は、観光客の求めるオーセンティシティ、村民の求める脱貧困、村当局の求める伝統文化と生態環境の保護という三つのステークホルダーの要求を分析し、それがバランスよく実現されたと評価している。

シャングリラ県東部にある香格里拉普達措国家公園の中の洛茸（落茸）社区に関しては、2008年に西南林学院が現地調査を行った。王哲・胡曉 [2009] は、50名以上の面接調査に基づき、生活空間・生産空間・依存空間（＝環境）でそれぞれ伝統が大きく変化していることを指摘し、観光開発が「双刃剣」とであると述べている。羅佳穎・薛熙明 [2010] は、観光

客との摩擦や村落社会の変化を負の側面としてとりあげ、持続的発展のためには、コミュニティ共同管理協会を設立して伝統や環境に配慮した観光商品やサービスを提供すべきだと具体的に提言している。

梅里雪山の麓にある雨崩村を調査した郭文 [2010] は、現地コミュニティが観光事業に参加し、馬丁や民宿を輪番制（轮流制）にして観光収入を分配することによって、経済（収入の増加）・政治（民主意識）・心理（共同体の結束）という各側面で権能を高めることができた結論付けている。同じ執筆者の参加した郭文・黄震方 [2011] では、シーサンパンナの傣族園と比較しながら、雨崩村コミュニティの権能発展を計量的に分析している。

熊燕 [2011] は、前述のシャングリラ改名を批判的に検討した執筆者が、チベット仏教の大寺院・松贊林寺のある措古隆村を調査した論文である。解放後に水田に変えられた松贊林寺の周りの湖の回復の意味が昔の宗教的神秘性から観光のための神秘性に変化していること、以前は村の中で漢族とチベット族の間にあった差異の自覚が現在は両民族合わせた地元住民と外来の観光客との差異の感覚へと変わって「他者性」が変化したことなど、興味深い論点が提示されている。

## 5. ルーゲー（瀘沽）湖のモソ（摩梭）人

もう一か所、筆者の前回の論文で紹介した観光地の中で、雲南・四川両省の境界にあるルーゲー（瀘沽）湖のモソ（摩梭）人の村落に関する研究も多い。ルーゲー湖では、神秘的な湖の景観とともに、モソ人の母系大家族制度や妻問婚が外来の観光客の興味を引いている。

ルーゲー湖の観光開発は、雲南側が先行したが、現在は四川側でも進んでいる。その両地域の経営方式を比較したのが干鸣丰 [2011] である。どちらも政府主導の民間自主開発の形態だが、村と家庭の経営に任されているため方式は多元的だとされ、今後は自主性を生かしながら統一モデルを作るべきだと提言されている。

ここでは、家族制度の特異性によるものか、ジェンダーについて論じた研究が目立つ。陈斌 [2004] は、観光開発によって女性が観光業に従事するようになり、近代に入って緩んでいた母系大家族制度が再び強化される傾向がみられると述べている。一方、魏雷ほか [2012] は、観光開発への関与の度合いの異なる三つの村落を比較し、経済条件・恋愛選択・コミュニティ参与などで相違がみられ、観光収入増加によって家計負担が男系女系とも平等になるなど、家族構造（「家屋」）における男性の役割が変化しているが、それは質的な変化まで及ばず、伝統的な家族制度は基本的に維持されていると解釈している。

民族問題については陈刚 [2012] がアンケートと訪問調査を行い、観光開発のあとモソ人と漢族など民族間の融和は進んだが、伝統への打撃が民族意識を強めたり、市場経済が貧富の格差を生み出したりといった問題も生じていることが指摘されている。

観光開発を推進する立場からの提言も多い。陈刚 [2009] は開発人類学の理論に基づいてこれまでの観光開発を肯定的に評価したうえで、発展意識、コミュニティ参与、権力問題、ステークホルダーという四つの分野で不足している点を指摘して改善策を提案している。谢金林・陈刚 [2009] は、麗江市瀘沽湖摩梭文化研究会・東方摩梭文化研究会（昆明）という外部のNPO、洛水村寺管会・跳舞隊・劃船隊・瀘沽湖景区酒店協会という村内の組織について、それぞれの機能の概略を紹介している。しかし2009年に里格村を調査した郭凌・王志章 [2009] は、資金や人的資源の不足からコミュニティ参与が不十分であり、教育訓練や付帯設備建設、資金供給などによって参与主体の育成を図るべきだと主張している。

一方、観光開発による伝統文化や村落の変化に対する正負の評価は二分されている。岳坤 [2003] は、落水下村の2軒の家庭の生活変化を詳細に記録しながら、これまで人類学者は観光開発による民族文化の変化を批判的に論じてきたが、変化は住民が主体的に選択したものであり、伝統文化の再建創造を通じて文化的現代生活を開く可能性があると主張している。邢耀匀ほか [2007] は、村落の空間構成や住居の形態を分析しながら、観光開発は集落の保護と持続的発展を両立させたと論じている。しかし、熊晓波ほか [2008] では、観光開放度の測定とアンケートの分析に基づいて、観光開発の度合いの大きい地区ほど社会文化的影響も強く受けていると主張している。樊天相ほか [2011] も、アンケート調査と訪問調査に基づいて、観光開発による外来文化の影響によって伝統文化や原始宗教は弱体化され、自然環境も悪影響を受けていると指摘し、その改善策を提唱している。程希平ほか [2013] も、観光開発が服装の簡略化、住居の近代化、言語の漢化などの変化を生み、コミュニティや家族制度にも影響を与えていることを明らかにしている。田野ほか [2013] は、無節操な観光開発が無形文化遺産（非物質文化遺産：後述）である手工芸品に打撃を与えて近い将来には復元不能な状況になりかねないので、先進国の経験に学びながら対策を講じるべきだと危機感を表明している。彭德远 [2008] は、とくに観光開発による自然環境の破壊に言及し、持続的発展のための早急な対策を求めている。

## 6. 世界文化遺産の麗江

次に、雲南省西北部の麗江をめぐる研究を紹介しよう。麗江の旧市街である麗江古城をはじめとする一帯は、1997年に世界文化遺産に指定され、ここを王都としていたナシ（納西）族の伝統文化とともに、国内外から多くの観光客を集めている（刘晓亮・丁林 [2012]）。麗江古城の都市空間のあり方や、建築・集落の修復と保存の方法については、王鲁民・吕诗佳 [2013] が詳しく紹介している。また、葛敬炳ほか [2009] も、都市計画や都市空間の変遷を跡付けながら、伝統都市が観光都市へ変化していく様子を具体的に描いている。周辺農村部も含めた景観と空間の変遷については、厦門と比較しながら、郭先华ほか [2011] がまと

めている。

麗江古城は、伝統建築や街並みを保存しながら民家を観光施設に改造して営業しているため、これをめぐる議論や実態調査は多い。

商店に関しては、黄珏ほか [2009] と墨紹山 [2013] が、それぞれ実態調査に基づきながら、観光開発に伴って現地住民が外来商人に置き換わり、取扱商品なども変化して伝統文化に影響を及ぼしたことを実証している。

小規模な家族経営の旅館（家庭旅館）も数多くみられ、古民家を改造した旅館（民居客栈）もある。彭青・曾国军 [2010] は家庭旅館の発展形態を、現地所有者が外部から来た経営者に任せる形態（6割以上にのぼる）、企業がチェーン展開する形態、現地経営者が旅館業以外に多角化を図る形態、従来の経営を続ける形態の4つに分類しながら分析している。李云 [2012] にも、家庭旅館の立地や件数などの概観がみられる。龙良富 [2013] は家庭旅館経営を感情労働（Affective labor）と位置付けて面接調査を行い、経営者にも観光客にも満足をもたらしていると述べている。宗晓莲 [2002] は、民居客栈が有形無形の伝統文化を保存するために有用だと認めながら、増築によって古民家の良さが失われるなど開発思想の問題、閑散期と繁忙期の宿泊費のコントロールができないなど経営能力の不足を指摘している。

酒場について、G・リッツァの「存在：something」と「無：nothing」を使って論じた孙九霞・王心蕊 [2012] は、酒場の経営者・従業員・客・周辺住民などさまざまな人物への面接調査によって、伝統文化にとって「無」である酒場が、観光文化によって「存在」となっていく様子を詳細に描き出している。

このような麗江古城の変化に対する住民の意識を調査した黄玉理 [2007] と黄玉理ほか [2008] によれば、住民は観光開発に必ずしも肯定的ではない。その理由は、観光収益の分配の問題にも関わり、また年長で土着の住民ほど観光開発への反感が強いといわれている。麗江古城だけでなく、世界遺産を構成する近郊の東河古鎮を調査した李平ほか [2013] でも、主観的な期待水準と現実的な達成水準のギャップによる「相対的剥奪感」を住民が抱いていることが指摘されている。ディベロッパーの投資で観光開発が進められた東河古鎮については、学術論文ではないが、田庆昌・石祺 [2008] が観光業の経営実態を紹介していて、興味深いルポである。

古い街並みだけでなく、ナシ族の文化（東巴文化）も観光商品として使われているが、その祭事を観光商品化する契機となった1999年の中国麗江国際東巴文化芸術節について、宗晓莲・戴光全 [2005] が詳しく伝えている。ここでもまた「創られた伝統」「文化再生産」といった概念が肯定的な文脈で使われ、「文化が舞台を作り、経済が劇を演じる（文化搭台，经济唱戏）」という中国の風潮を象徴的にあらわしている。さらにこの傾向が著しいのが桂榕 [2013] で、郊外の玉水塞で観光用に新たに作られた記念碑・塑像・展示館や、現代の行事に合わせた宗教行事の改変などを紹介しながら、生活化された観光空間の形成によって文

化の主体性と真実性が確立されたと肯定的に評価している。

もちろん、このような肯定的な評価ばかりではない。廖冬梅・张诗亚 [2006] は、2005年に麗江で資料収集と小中学校の授業を行った経験から、観光開発や人口移動が民族文化を歪曲し、児童が伝統祭事を知らず、絵に描かせると見当はずれな内容になることなど、興味深い事例を報告している。光映炯 [2008] は、観光開発に伴う商業化・複製化・娯楽化・コード化によって、フォークアート（民間芸術）は観光芸術（旅游芸術）に変化してしまったと批判する。杨杰宏 [2013] も同様の観点から、やや抽象的だが東巴文化の変容を列挙している。また、観光に伴う現象をユニークな視点でまとめたのが、赵红梅・李伟 [2010] で、外部世界に対してエスニックグループの特徴を強調しながら登場した「観光有名人」の実例をあげ、海外向けに民族文化の独自性を宣伝する「世界名人（世界的有名人）」、伝統文化を神秘的に演じてみせる「職業土着（プロの先住民）」、麗江古城で東巴文化をさまざまに演じる「村夫野老（無教養な庶民）」に分類しながら、やや皮肉に紹介している。

一方、杨子江・王秀红 [2010] と王秀红 [2011] は、観光客の求めるオーセンティシティを4つに分類したうえで、5つの動機づけとの関係をアンケート調査して、客観的オーセンティシティ（objective authenticity）への志向が最も強いことを明らかにした。

また、観光や文化を経済活動という側面からとらえる研究もある。高烈明 [2013] は、観光産業と文化産業の融合発展モデルを示す。そして文化産業については、杨杰宏 [2009] が、在地資本による納西古楽と東巴宮という二つの企業を紹介している。丁雨莲 [2006] は、麗江古城と周辺村落の店舗を比較し、古城には時間を過ごすための各種飲食店が多いことを明らかにして、物見遊山の見物（中国語の「観光」）から余暇を楽しむことへと需要が変化することに対応すべきだと説いている。

ジェンダーあるいは社会学的な「役割（Role）」の視点から、観光業と女性のかかわりを論じた周爱萍 [2010] は、麗江郊外の農村観光も含めてサービスや手工芸品の生産などでナシ族女性の役割が拡大したことを紹介している。さらに、「役割」の観点から麗江古城と郊外の玉竜でアンケート調査をした余丹 [2013] によれば、観光業に関わる女性の属性には農村出身・低学歴・若年という偏りがあり、また属性によって就業分野が限定されるという結果が提示されている。一方、観光業とジェンダーについてアンケート・面接調査を行った杜林玲・石修俊 [2010] は、就業によって自己の能力への認識は高まり、自立意識も他の業種より低い徐徐に高まっていると分析したうえで、性別役割分担については伝統的意識が残存しているという結果を提示している。

## 7. 非物質文化遺産

最後に、無形文化遺産（中国語で非物質文化遺産）について一言しておきたい。これは

2003年にユネスコが採択した「無形文化遺産の保護に関する条約」で定められ、有形の文化的・自然的遺産を指定する世界遺産とは別の枠組みで、風習・民族音楽・口承伝承など無形の文化を保護するものである。審査の厳しい世界遺産に比べて登録国に偏りがみられ、ある文化について複数の国家が固有性を主張し合う事例もあらわれている。アジアでは中国が日本や韓国と並んで登録件数が多く、とくに中国は2011年に非物質文化遺産法を制定するなどその保護に力を入れている。しかし、非物質文化遺産が経済的権益や知的財産権と強く結び付けられるなどの特徴があり、本稿で指摘したような観光開発と関連して今後の動向を注目していくべきだろう<sup>6)</sup>。雲南省の非物質文化遺産に関する総合的な研究と提言は、安学斌・曹志杰[2012]に示されている。とくに、巻末付録の「云南国家级非物质文化遗产保护与旅游开发研究报告」は有用である。

## 8. おわりに

以上、簡単にいくつかの注目すべき論点を紹介した。ここで漏れた論文もあるだろうし、リストで存在はわかっているが入手できず紹介できなかった論文も少なくない。また、とりあげた観光地も、都市観光の昆明、観光開発で創り出されたシャングリラ、観光開発以前には外部との接触がほとんど無かったルーラー湖、世界遺産として大規模開発の進んだ麗江という、それぞれ違ったタイプを選んだが、このほかにも大理やシーサンパンナなど議論すべき対象は多い。しかし、次のような大まかな傾向は明らかにできたと思う。

第一に、近年の中国の研究は欧米を中心に提起された分析概念を積極的に用い、外国にいる我々も議論に参加できる共通の土台が固まりつつあるということである。第二に、論文の紙数などの制約はあるが、アンケートやフィールドワークに基づく実証的な研究が増え、豊富なデータを提供してくれていることである。第三に、観光開発を経済開発の重要な一環と位置付けているため、開発による変化、とくに民族文化に及ぼす影響を予定調和的にとらえる楽観的な見解も少なくないことである。しかし、その見解は経済開発の側に立った政治的な主張だけでなく、これまで「学問的先進性」を示しながら発展途上国の現状を批判してきた海外の研究に対する、「客体」の側からの逆襲といえる面もあるだろう。

このような中国における研究の進展を前提にして、外国にいる我々がどのような問題意識を持ち、どのような分野で研究に貢献できるかを考えなければならない。

(本研究は、2014年度の東京経済大学国内研究の研究成果の一部である)

### 注

1) 村上勝彦・松本光太郎編『中国雲南の開発と環境』日本経済評論社、2013年

- 2) International Charter for the Conservation and Restoration of Monuments and Sites (the Venice Charter 1964)  
[http://www.bunka.go.jp/kokusaibunka/bunkazaihogo/pdf/nara\\_VC\\_e.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokusaibunka/bunkazaihogo/pdf/nara_VC_e.pdf)
- 3) 「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」  
[http://www.bunka.go.jp/kokusaibunka/bunkazaihogo/pdf/nara\\_Nara\\_j\\_02.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokusaibunka/bunkazaihogo/pdf/nara_Nara_j_02.pdf) (2014年10月1日閲覧, 以下同じ)
- 4) MacCannell, D., "The Tourist: A New Theory of the Leisure Class", MacMillan, 1976.
- 5) 赵煌庚主编『城市旅游』科学出版社, 2010年, 卞显红『城市旅游空间分析及其發展透视』中国物资出版社, 2005年, 阮仪三『城市遗产保护论』上海科学技术出版社, 2005年。
- 6) 無形文化遺産の一般的な問題点について, たとえば2014年11月4日に国立民族学博物館・日本経済新聞社主催で開かれた公開講演会「無形文化遺産 選ぶ視点 選ばれる現実」のように, 日本では社会的な関心も生まれている (『日本経済新聞』2014年11月28日)。

### 参 考 文 献

#### 【単行本】(ピンイン配列)

- 安学斌・曹志杰 [2012]: 『云南国家级非物质文化遗产保护的理论与方法』(云南民族大学学术文库) 中国社会科学出版社
- 王鲁民・吕诗佳 [2013]: 『建构丽江——秩序・形态・方法』三联书店
- 杨福泉 [2005]: 『2004～2005 云南旅游發展报告』云南大学出版社
- 杨寿川主编 [2003]: 『云南民族文化旅游资源开发研究』中国社会科学出版社
- 尹绍亭 [2002]: 『民族文化生态村: 云南试点报告』云南民族出版社
- 张晓萍主编 [2005]: 『民族旅游的人类学透视——中西旅游人类学研究论丛』云南大学出版社
- 祝勇 [2013]: 『十城记 中国城市的历史性伤痛』(祝勇作品系列) 东方出版社
- Mitchell, S., [2003]: "Tourism and Development in Yunnan" Yunnan Fine Arts Publishing House

#### 【論文】(ピンイン配列)

- 陈飙・钟洁・杨桂华 [2007]: 「云南香格里拉藏族社区参与旅游发展过程的限制性因素研究」(『西南民族大学学报(人文社科版)』2007年第8期)
- 陈斌 [2004]: 「旅游發展对摩梭人家庭性别角色的影响」(『民族艺术研究』2004年第1期)
- 陈刚 [2009]: 「发展人类学视野中的文化生态旅游开发——以云南泸沽湖为例」(『广西民族研究』2009年第3期)
- 陈刚 [2012]: 「多民族地区旅游发展对当地族群关系的影响——以川滇泸沽湖地区为例」(『旅游学刊』第27卷第5期)
- 陈浩・张京祥・宋伟轩 [2010]: 「空间植入: 大事件对城市社会空间演化的影响研究——以昆明为例」(『城市发展研究』第17卷第2期)
- 陈茜茜・罗明义 [2012]: 「昆明休闲旅游资源空间结构分析」(『云南财经大学学报(社会科学版)』第27卷第3期)
- 程希平・马薇・彭维纳 [2013]: 「旅游开发对泸沽湖摩梭社区的影响分析」(『西部学刊』2013年第6期)

- 戴光全·保继刚 [2006]:「'99 世博会对昆明城市形象的影响研究」(『人文地理』2006 年第 1 期)
- 邓永进·郭山 [2001]:「香格里拉民族生态旅游的设计与实践——来自云南省中甸县霞给村的研究报告」(『思想战线』第 27 卷第 2 期)
- 丁雨莲·陆林·黄亮 [2006]:「文化休闲旅游符号的思考——以丽江大研古城和徽州古村落为例」(『旅游学刊』第 21 卷第 7 期)
- 杜林玲·石修俊 [2010]:「民族地区旅游业对当地女性性别观念的影响——以丽江古城为例」(『玉溪师范学院学报』第 26 卷第 2 期)
- 樊天相·孙萍遥·徐纯樾 [2011]:「旅游开发对摩梭民俗文化的负面影响及对策研究」(『西南农业大学学报(社会科学版)』第 9 卷第 6 期)
- 干鸣丰 [2011]:「川滇民俗文化旅游经营模式比较研究——以泸沽湖摩梭村寨为例」(『乐山师范学院学报』第 26 卷第 12 期)
- 高芳·欧阳佳佳 [2007]:「《云南映象》旅游真实性要素分析」(『昆明冶金高等专科学校学报』第 23 卷第 4 期)
- 高芳 [2008] a:「国内游客监看民族歌舞的真实性体验研究——以云南映象为例」(『昆明大学学报』第 19 卷第 2 期)
- 高芳 [2008] b:「民族旅游开发中的文化商品化与文化真实性关系辨析——以《云南映象》为例」(『保山师专学报』第 27 卷第 3 期)
- 高烈明 [2013]:「文化产业与旅游产业融合发展模式研究——以丽江为例」(『浙江工商职业技术学院学报』第 12 卷第 4 期)
- 葛敬炳·陆林·凌善金 [2009]:「丽江市旅游城市化特征及机理分析」(『地理科学』第 29 卷第 1 期)
- 光映炯 [2008]:「旅游人类学视野中的民间艺术变异研究——以丽江大研镇纳西族东巴艺术为例」(『广西民族研究』2008 年第 3 期)
- 桂榕 [2013]:「从景观生产视角看民族文化遗产的旅游利用与保护传承——以丽江玉水寨为例」(『广西民族研究』2013 年第 3 期)
- 郭凌·王志章 [2009]:「论民族地区旅游社区参与主体的培育——以泸沽湖里格岛为例」(『广西师范大学学报(哲学社会科学版)』第 45 卷第 3 期)
- 郭先华·赵千钧·崔胜辉·吝涛·石龙宇 [2011]:「不同城市化水平旅游城市景观动态对比研究——以丽江和厦门为例」(『长江流域资源与环境』第 20 卷第 2 期)
- 郭文 [2010]:「乡村居民参与旅游开发的轮流制模式及社区增权效能研究——云南香格里拉雨崩社区个案」(『旅游学刊』第 25 卷第 3 期)
- 郭文·黄震方 [2011]:「乡村旅游开发背景下社区权能发展研究——基于对云南傣族园和雨崩社区两种典型案例的调查」(『旅游学刊』第 26 卷第 12 期)
- 黄静波 [2006]:「香格里拉国内旅游者行为特征的经济分析」(『求索』2006 年第 2 期)
- 黄珏·张天新·山村高淑 [2009]:「丽江古城旅游商业人口和空间分布的关系研究」(『中国园林』第 25 卷第 5 号)
- 黄玉理 [2007]:「基于旅游影响感知的丽江古城居民类型划分」(『云南地理环境研究』第 19 卷第 4 期)
- 黄玉理·龙良富·王玉琼 [2008]:「我国世界遗产地居民对旅游影响感知与态度的比较研究——以平遥、丽江古城为例」(『人文地理』2008 年第 2 期)
- 贾磊 [2013]:「西部城市旅游感知形象研究——基于网络点评的文本分析」(『浙江旅游职业学院学报』第 9 卷第 3 期)

- 江枫 [2013]:「昆明正面临严重的城市特色危机」(『创造』2013年第9期)
- 金莲芳 [2014]:「云南藏区文化旅游业发展问题探索——以迪庆藏族自治州为例」(『经济研究导刊』2014年第6期)
- 李超·张兵 [2010]:「“丽江模式”缺陷的探讨」(『昆明理工大学学报(社会科学版)』第10卷第5期)
- 李平·宋宛锋·刘晓石·周晓贞 [2013]:「旅游地社区居民“相对剥夺感”的心理疏导对策研究——以丽江束河古镇为例」(『旅游市场』2013年第9期)
- 李小波·于希贤 [2001]:「昆明世博园规划的主题升华与城市旅游形象」(『旅游学刊』第16卷第6期)
- 李云 [2012]:「丽江古城家庭旅馆发展研究」(『昆明冶金高等专科学校学报』第28卷第4期)
- 廖冬梅·张诗亚 [2006]:「丽江的旅游开发对传统纳西文化传承的影响」(『民族教育研究』第17卷第4号)
- 刘德鹏·张晓萍 [2009]:「后现代旅游背景下古镇旅游的真实性创造——以云南省楚雄州彝人古镇为例」(『云南地理环境研究』第21卷第6期)
- 刘晓亮·丁林 [2012]:「丽江市客源地市场现状分析」(『红河学院学报』第10卷第6期)
- 龙良富 [2013]:「家庭旅馆经营中的情感劳动研究——以云南丽江客栈为例」(『中南林业科技大学学报(社会科学版)』第7卷第4期)
- 龙彦青 [2008]:「快速发展中的香格里拉县旅游业存在问题研究」(『安徽农业科学』第36卷第33期)
- 罗洁璐 [2012]:「栖息在文化与旅游之间——《印象·丽江》(雪山篇)纪实访谈与思考」(『民族艺术研究』2012年第2期)
- 罗佳颖·薛熙明 [2010]:「香格里拉普达措国家公园洛茸社区参与旅游发展状况调查」(『西南林学院学报』第30卷第2期)
- 罗志辉·甘巧林 [2014]:「泛珠三角14个重点旅游城市旅游发展现状比较和类型分析——兼论各类城市的旅游发展对策」(『云南地理环境研究』第18卷第2期)
- 马继刚·宋金平·朱桃杏 [2012]:「基于模糊层次评判模型的旅游地集散能力评价——以昆明为例」(『经济地理』第32卷第8期)
- 马继刚·李飞·周彬学·唐忠明 [2014]:「旅游集散地:区位合理性与功能提升——以云南昆明为例」(『经济地理』第34卷第2期)
- 马耀峰·张佑印 [2007]:「旅华英国游客对我国旅游价格与服务质量的感知研究」(『干旱区资源与环境』第21卷第4期)
- 墨绍山 [2013]:「历史城镇人口置换问题研究——基于云南丽江古城的再思考」(『经济地理』第33卷第11期)
- 宁德煌·王晓东 [2010]:「昆明城市旅游目的地品牌构建研究——基于国外游客视角」(『中国市场』2010年第14期)
- 彭德远 [2008]:「论泸沽湖旅游业的可持续发展」(『云南农业大学学报』第2卷第3期)
- 彭青·曾国军 [2010]:「家庭旅馆成长路径研究:以世界文化遗产地丽江古城为例」(『旅游学刊』第25卷第9期)
- 彭莹·齐欣·王昕 [2013]:「利益相关者视角下民俗文化“原真性”保持研究——以云南泸沽湖摩梭文化为例」(『旅游研究』第5卷第5期)
- 孙九霞·王心蕊 [2012]:「丽江大研古城文化变迁中的“虚无”与“实在”:以酒吧发展为例」(『旅游学刊』第27卷第9期)
- 陶伟·岑倩华 [2006]:「历史城镇旅游发展模式比较研究——威尼斯和丽江」(『城市规划』第30卷

第5期)

- 田庆昌·石祺 [2008]:「开发中的保护:一段历史文化与现代商业的对话——丽江束河古镇的旅游商贸物业运营启示」(『现代物业·新业主』2008年第9期)
- 田野·王鹭 [2013]:「泸沽湖摩梭人非物质文化遗产的现状反思」(『艺术教育』2013年第3期)
- 王秀红 WANG, Xiu-hong [2011]: 'Empirical Research on Tourism Authenticity of Ancient Cultural City——A Case Study of Lijiang Ancient City in China' ("Journal of Landscape Research "Vol. 3 No. 8)
- 王哲·胡晓 [2009]:「旅游发展对落茸社区生态文明变迁影响的个案研究」(『旅游研究』第1卷第4期)
- 魏雷·唐雪琼·朱竑 [2012]:「旅游发展影响下的摩梭家屋形态——基于男性角色的考察」(『云南师范大学学报(哲学社会科学版)』第44卷第3期)
- 闻飞·王娟 [2012]:「中国热点旅游城市旅游国际化水平定量评价研究」(『人文地理』2012年第2期)
- 谢金林·陈刚 [2009]:「与民族旅游的可持续发展——以泸沽湖地区为例」(『云南社会科学』2009年第5期)
- 谢雪梅·马耀峰·白凯 [2011]:「旅华游客对中国西部城市旅游认知研究」(『新疆师范大学学报(自然科学版)』第30卷第1期)
- 邢耀匀·夏铸九·戴俭 [2007]:「泸沽湖摩梭母系家屋聚落的保存与旅游开发」(『建筑学报』2007年第11期)
- 熊晓波·赵景柱·刘昕·严岩 [2008]:「旅游开放度对摩梭文化的影响研究」(『中国人口资源与环境』第18卷第5期)
- 熊燕·杨筑慧 [2007]:「从“中甸”更名为“香格里拉”——看地方文化的重建」(『中央民族大学学报(哲学社会科学版)』2007年第5期)
- 熊燕 [2011]:「旅游开发背景下的地方文化重构——以香格里拉县措古隆村为例」(『旅游研究』第3卷第4期)
- 徐新建 [2012]:「民族文化与现代旅游」(『三峡论坛』2012年第6期)
- 徐秀美 [2011]:「昆明城市旅游转型期文化街区的功能演化分析」(『吉林师范大学学报(自然科学版)』2011年第5期)
- 徐尤龙·杨懿·康媛洁 [2012]:「基于“三地”分析理论的昆明市旅游形象研究」(『云南地理环境研究』第24卷第6期)
- 杨杰宏 [2009]:「丽江本土文化产业的调查与总结——以纳西古乐, 东巴宫为例」(『民族艺术研究』2009年第4期)
- 杨杰宏 [2013]:「多元互动中的旅游展演与民俗变异——以丽江东巴文化为例」(『民俗研究』2013年第2期)
- 杨丽琼·吴丽娴 [2008]:「旅游表演中的艺术真实性分析——以云南少数民族歌舞表演为例」(『内蒙古大学艺术学院学报』第5卷第4期)
- 杨桂华 [2003]:「民族生态旅游接待村多维价值的研究——以香格里拉霞给村为例」(『旅游学刊』第18卷第4期)
- 杨小明 [2013]:「大香格里拉旅游业发展竞合关系研究」(『地域研究与开发』第32卷第3期)
- 杨子江·王秀红 [2010]:「古城文化型景区旅游真实性实证研究——以丽江古城为例」(『旅游研究』第2卷第4期)
- 姚宏·孙根年·贾英 [2007]:「城市国际旅游环境竞争力测评与提升策略」(『西安财经学院学报』第

20 卷第 4 期)

- 余丹 [2013]:「丽江纳西族女性在旅游业中的角色分析」(『贵州民族研究』第 34 卷第 2 期)
- 袁国友 [2001]:「论文化遗产的保护利用与开发——昆明历史文化名城保护的研究与思考」(『思想战线』第 27 卷第 3 期)
- 岳坤 [2003]:「旅游与传统文化的现代生存——以洱沽湖畔落水村为例」(『民俗研究』2003 年第 4 期)
- 赵红梅·李伟 [2010]:「族群视野下的“旅游名人”现象——基于丽江旅游的人类学考察」(『中南民族大学学报(人文社会科学版)』第 30 卷第 4 期)
- 张娟娟, 马耀峰 [2011]:「西安, 成都, 昆明入境旅游市场动态演化对比分析」(『资源开发与市场』第 27 卷第 8 期)
- 张文芬 [2012]:「模仿式古镇旅游的真实性创造——以云南省楚雄州彝人古镇为例」(『云南电大学报』第 14 卷第 2 期)
- 张文芬·李天顺 [2012]:「模仿式古镇旅游的开发价值——以云南省楚雄州彝人古镇为例」(『广西师范学院学报:自然科学版』第 29 卷第 2 期)
- 张晓萍 [2001]:「从旅游人类学的视角透视云南旅游工艺品的开发」(『云南民族学院学报:哲学社会科学版』第 18 卷第 5 期)
- 张瑜·马耀峰 [2008]:「北美游客对中国六大热点旅游城市认知行为研究」(『云南地理环境研究』第 20 卷第 1 期)
- 周爱萍 [2010]:「纳西族女性在丽江旅游业参与中的角色分析」(『思想战线』第 36 卷第 S1 期)
- 庄志民 [2006]:「中国大香格里拉旅游区感性游走中的理性思考——兼评《中国国家地理》“川滇藏大香格里拉典藏版”」(『旅游科学』第 20 卷第 5 期)
- 宗晓莲 [2002]:「丽江古城民居客栈业的人类学考察」(『云南民族学院学报(哲学社会科学版)』第 19 卷第 4 期)
- 宗晓莲·戴光全 [2005]:「节事旅游活动中的文化表达及其旅游影响——国际东巴文化艺术节的旅游人类学解读」(『思想战线』第 31 卷第 2 期)
- Miegge, M., Voltolini F., Lihong [2008]: 'The Tibetan Village of North West Yunnan —— a Basic Grammar of Local Authenticity' ("China Tibetology" No. 2, 2008)